新　刊

□茂木　透（写真），高橋秀男ほか（監修），石井秀美ほか（解説）：**樹に咲く花　合弁花・単子葉・裸子植物**　719 pp．2001．山と渓谷社．¥3,600（＋税）．

離弁花1と2は，すでに本誌75巻4号と76巻2号の紹介で高く評価されている．それぞれの種類の特徴となるような細部，たとえば花の内部，芽，葉痕，葉のパタン，毛，種子，樹皮などが丹念に示され，それらを用いて科における属の見分け方，属内の種の見分け方が，一覧比較してわかるように工夫されている．とかく敬遠され勝ちなササ属についても，画像を使って同定のポイントを説明する試みがなされている．とくに種子の撮影は，被写体を準備するまでの作業が容易ではなかったことが，茂木氏のあとがきからうかがえる．本書によって，「樹に咲く花」の三分冊が揃ったことになるが，同様に「草に咲く花」という企画もほしいものだ．樹だけでも20年近くの歳月を要したのだから，草となったら世代を超えた努力が必要になるだろう．一方，これだけ豊富な映像資料を，単なる「植物図鑑」としてのみに終わらせるのはたいへんもったいない気がする．つまり，種子だけの図鑑，芽だけの図鑑，毛だけの図鑑というものができないだろうかと考えた．植物の同定という作業は，いわゆるおしば標本的なものを対象とするばかりではない．鑑識（これも identification と呼ばれる）という立場からすると，考古，古生物，捜査，材料などの分野では，一片の破片からでも原植物の見当をつける必要に迫られる．今のところ日本の植物について，そういうとき頼りにすべき図鑑はない．葉痕や冬芽については，関心が高まった時期があったが，一時のブームに終わってしまった．

監修に当たった高橋秀男氏があとがきで，「美しい写真におされて，形態の記述はアクセサリー的な存在になってしまった」と嘆息しておられるが，こういう部分図鑑を作るとなれば，解説者が存分に腕をふるう場が提供されるだろうし，それをやるためには新たな勉強が必要になるので，分類学にとっても新知識の蓄積に貢献することだろう．たとえば同じく監修の勝山輝男氏は，あとがきで検索表の問題点にふれておられる．鑑識用図鑑となれば，図の配列を含めて，検索を有効に行えるための一層の工夫が必要になるだろう．もっとも，そういう図鑑に十分な販路があるかどうかわからないが，近頃はCDなどいろいろな表現媒体があるので，選択の余地があるだろう．　　（金井弘夫）

□福井植物研究会編：**福井県植物図鑑　V　福井のコケと地衣・[補遺]**　280 pp．2001．福井植物研究会発行（〒910–0006　福井市中央 2–8–27）．

福井県植物図鑑の5冊めの発行である．蘚苔類，地衣類，変形菌類，淡水藻類，補遺として，今まで載せられていなかった60種の維管束植物と，タケ類が収められている．若杉孝生が中心で，蘚類は西村直樹，苔類は古木達郎，変形菌類は萩原博光，淡水藻類は安達誘，タケ類は小林幹夫など，それぞれの分類群の専門家が中心となって執筆しているので，内容は確かである．この5巻で福井県の植物は網羅されたことになる．維管束植物1840種，シダ植物250種，蘚苔類150種，地衣類65種，藻類212種など2517種が記載されている．シダ類や維管束植物は網羅すべく努力がなされているが，淡水藻類などは一部しか収録されていないので，これで福井県の植物が総てだとは言えないが，おおよその見当はつく．永年の研究の結果がこの本に収録されたわけで，その努力に敬意を表する．写真も美しいので，見ていても楽しい本である．　　（山崎　敬）

□李　永魯：**韓国植物図鑑　改訂増補版**　1265 pp．2002．Kyo-Hak Publishing Co., Ltd. 105–67, Gongdong, Mapo-gu, Seoul, Korea. 18,000 ウオン

1996年に李　永魯の韓国植物図鑑が発行されてから5年になる．今回その改定版が発行された．本の体裁は同じであるが，数種類の学名を変更し，新しく発見された十数種を加え，多数の写真を入れ替えてある．韓国の総ての植物を扱った図鑑としては，李　昌福の大韓植物図鑑（1980），李　愚喆の原色韓国

基準植物図鑑（1996）があり，これらを利用すれば，韓国の植物の同定は容易である．ただこれら総てが韓国語で記載されているので，類似した種類の区別は容易でない．日本の図鑑でも同じだからおおきなことは言えないが，せめて重要な特徴は英語を併記してくれると，外国の利用者には便利になるのだが．

（山崎　敬）

□李　冠儀（編）：**台湾水生植物図誌** 378 pp. 2001. 行政院農業委員会．100台北市中正区南海路37号．1,000台湾ドル．

楊　遠波，顔　聖紘を中心とした22人の執筆者によって記載されたもので，シダ類以上の維管束植物で，水生するもの約三百十数種が収録されている．それぞれの科での属や種の索引，種類の記載や成育状態，主な種類の図があり，後の頁に成育場所や種のカラー写真が載せられ，学名以外は総て中国語で記載されている．日本やアメリカで出されている水生植物誌とほぼ同じ体裁であり，その台湾版といえる．

（山崎　敬）

□Noshiro S. and Rajbhandari K. R. (eds.): **Himalayan Botany in the Twentieth and Twenty-first Centuries** 212 pp. 2002. Academia, Tokyo. ￥9,600.

東京大学の原　寛教授がネパールのDepartment of Plant Resourcesと協同して，ヒマラヤの植物調査を始めてから40周年を記念するシンポジウムが，2001年5月にカトマンズで開催され，私は当初からの生き残りとして参加した．本書はその記録である．東京大学のヒマラヤ植物調査は，初期段階の，募金・すべての用品の日本での調達・船荷・カルカッタでの通関・ネパールへの輸入という経済的物理的障壁の克服に時間と労力を費やす時代に始まり，両国の発展，両機関の協力関係の緊密化，ネパールにおける観光産業の発達，交通手段の進歩などのおかげで，今日では現場への往復については，大した負担を感じることなく実現できるようになった。原　寛教授の後は，金井弘夫，大橋広好，大場秀章と引きつがれてきたが，大場氏の時代になって質的転換をとげ，それ迄のフロラ把握のための広範大量の標本採集から，参加者がそれぞれのテーマを持って調査研究を行う様態に進化した．また大場氏が主唱してFlora of Nepal Projectが，国際協同研究事業として発足している．

Part 1は古参メンバーによる回顧とH. OhbaおよびK.R.Rajbhandariによる歴史的回顧と将来への展望が，多数の文献や地図の引用を伴って述べられている．Part 2では，現役メンバーそれぞれの研究テーマによる成果が示され，これ迄の資料蓄積の上に立って，フロラのみならず，モノグラフ，組織，生理，遺伝，文献学など，多様なトピックが披露されている．Part 3は調査に同行したネパール人研究者が，それぞれの異文化体験を語っている．本書の冒頭にある私の回顧談も，逆の意味での異文化体験なのだが，日本側主催の調査旅行とネパール側主導のそれとでは，日々に起こるトラブルの中身が全然違うということは，本書の性格上書けなかった．

ネパールでは，不安定な政情を支えてきた王権の衰退による政治機構の変化が，研究体制にも当然のことに影響を及ぼしていることが，いくつかの文の端々に暗示的に記されている．このシンポジウムのわずか一週間後に起こった王室内部の激変と，最近のいわゆる「マオイスト」による地域騒乱は，今後の研究の発展に大きな影響を与えるであろう．日ネ両国の善意ある研究者の努力によって，これらの困難を克服して研究が進展し，あわせてFlora of Nepalの順調な成果蓄積に期待したい．

本書はアカデミア書店（Tel. 03-3813-9805, Fax. 03-3812-8509）で扱っている．なお本誌76巻6号で紹介したK.R.Rajbhandari: A Bibliography of the Plant Science of Nepal, Suppl. 1とそのCDも，同書店で入手できる．

（金井弘夫）